

サンティアゴ・デ・コンポステーラと大聖堂

菅 谷 成 子

はじめに

サンティアゴ・デ・コンポステーラ市（以下サンティアゴと略記）は、スペイン北西部のガリシア自治州（Comunidad Autónoma de Galicia；人口277万人、公用語ガリシア語、スペイン語）のア・コルーニャ県（Provincia da Coruña）に位置しており、ポルトガル国境にも近い。マドリードからは直線距離にして約500キロである。人口は約93,000人余り（2007年）に過ぎないが¹⁾、ガリシア自治州政府の首府²⁾として、地方行政の中心都市であるとともに、16世紀に創設された国立サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学を擁する大学都市であり、また観光都市でもある。

現代の観光都市としてのサンティアゴには、中世より西欧カトリシズム世界における、イエルサレム、ローマとならぶ3大巡礼地の一つとして、多数の巡礼者を集めてきた歴史がある。サンティアゴ旧市街には、巡礼の目的地であるサンティアゴの大聖堂が聳えている。大聖堂には聖ヤコブの遺骸が安置されているとされ、巡礼者は、主祭壇の銀および宝飾を施された聖ヤコブ坐像を拝した後、その背後に設けられた階段から聖像に触れ、さらに主祭壇地下のクリプトで聖ヤコブの銀白色の聖遺物櫃を拝する。

サンティアゴ旧市街は、1985年にユネスコの世界文化遺産に登録された。さらに、1993年には、フランス国境一ロンセスバリェス（ロンスヴォー）およびソンボール峠からサンティアゴに至るスペインの巡礼路（「フランス（人）の道（Camino francés）」および「アラゴンの道」）の全行程が世界文化遺産に指定された。さらに、サンティアゴは、2000年度の「ヨーロッパの文化都市（European City of Culture for the year 2000）」に指定された。世界遺産としての整備が進むにつれ、観光都市として、日本にもその魅力が紹介されるようになった。

一方、サンティアゴに至る巡礼路はヨーロッパ全域にわたっており、スペイン国内各地を起点とするものはもとより、海路も含めて、多数のルートが知られている。なかでも、世界文化遺産に指定された「フランス（人）の道」「アラゴンの道」に接続するフランス国内の巡礼路の一部は、1998年に周辺の歴史地区とともに世界文化遺産に別登録・指定された³⁾。サンティアゴ巡礼は、本来、カトリック（キリスト）教徒のものであるが、世界遺産としての巡礼路の整備が進むにつれ、必ずしも宗教的な目的を第一義としないで、巡礼路を踏破する者も増加している。それにともなって、サンティアゴ巡礼を行う日本人も多くなり、その体験を綴ったウェブサイトや出版物も珍しくない。

ここでは、聖地としてのサンティアゴの発展と大聖堂を中心に、ガリシア地方とサンティアゴ巡礼との関係について、歴史的に概観したい。

1. 「フィニス・テーレ（地の果て）」

サンティアゴとは、スペイン語でキリストの12使徒の一人、使徒のなかで最初の殉教者として、44年にパレスティナで斬首されたと伝えられる聖大ヤコブ（聖ヤコブ）を指す。聖ヤコブは、現在においてもスペイン国家の「守護聖人」的意味を保持している。一方、コンポステーラは「星の野（Campus Stellae）」が語源ともいわれるが、近年の研究によれば、おそらく「構造物／埋葬地（Compositum）」を起源にしていた。

それでは、聖ヤコブはヒスパニア（スペイン）とどのように関わるのであろうか。7世紀のセビーリヤの

聖イシドルス（560-636年）⁴¹ が作成したとされる偽文書のなかにある、聖ヤコブがスペインで伝道したとする記述が最初とされる（マール、215頁）。そして、9世紀初めには⁵¹、聖ヤコブの墓所が「発見」されたのである。12世紀に編纂された『聖ヤコブの書』などによれば、ペラーヨ（ペラギウス／パイオ）という隠修士が天使のお告げによって聖ヤコブの遺骸の存在を知った。その後、何人かの信徒がその正確な位置を指し示す光を見て、それをイリア（パドロン）司教のテオドミーロ（テオドミルス）に知らせた。テオドミーロは自らその場所に赴いて森に入り、木々の茂みのなかに小さな建物を見つけ、そのなかに聖ヤコブの大理石の墓を発見した（マール、215-16頁；関、2006年、83-84頁；杉谷、2002年、111-12頁）。

ガリシア地方には先史時代から人が住んでおり、同時代のヨーロッパに共通する文化状況にあった。紀元1-2世紀になると、ガリシア地方はローマの支配を受け、ガラエシアと呼ばれた。ローマの建造物は、ア・コルーニャのヘラクレスの塔（燈台）やルーゴの城壁などにみとれる。サンティアゴにはジュピター神殿と墓地などが設置されたが、6世紀後半には西ゴートに制圧された。この間、ケルト族やスエヴィ族などは支配者に融合・吸収されて、ヒスパノ・ローマ人として、キリスト教（カトリック）信仰も広まっていたが、辺境のガリシア地方の人びとは異教・異端的文化伝統を長らく保持していた。一方、6世紀末になると西ゴートのレカレド王は、異端とされたアリウス派からカトリックに改宗した。

4世紀末、パドロン出身のアピラ司教プリスシリアーノ（プリスキリアヌス）は、異教的民衆信仰を習合したキリスト教を説き、ガリシア地方の人びとの熱心な支持をえた。しかし、カトリックの正統教義である三位一体説を否定したため、384年のボルドーの公会議で異端とされ、ローマ皇帝マグヌス・マクシムスの命によって385年に、ガリアのトレヴェリス（ドイツ）で処刑された。これは異端として処刑された最初の例であった。4年後、その遺体は12名の弟子により、ピレネー山脈のソンポール峠越えのローマ道（後の巡礼路）を辿って持ち帰られ、サンティアゴに埋葬されたといわれている。ここにみられるのは、次節に紹介する聖ヤコブの移葬の物語との類似性である。いずれにせよ、ガリシア地方の人びとは、聖ヤコブ崇敬に先立って、実は、プリスシリアーノを殉教者として崇敬し、その墓所に参詣していたのである。

そして、ガリシア地方は、地理的に「太陽の沈む地」すなわち「フィニス・テレー（地の果て）」—ヨーロッパ大陸の極西の地、大西洋に面する「辺境」でもあった。すなわち「日没に象徴される宇宙的な生と死の舞台、その死が翌日の黎明とともに蘇生する奇蹟顕現の場所」で「天と地が一体化し、宇宙＝『異界』へとつながる『永遠の救済の地』」を表象していると解釈できる土地でもある（関、1999年、127頁）。

このことは、8世紀に始まるイスラーム勢力のイベリア半島への進出にともなって、キリスト教勢力との間に15世紀末葉まで繰り返された闘ぎあいのなかで、ガリシア地方が、イベリア半島の辺境であったからこそ、キリスト教世界において占めることになった独自の歴史的意味ともつながっていた。すなわち、異教の文化伝統をもつ／もっていた地域が、イベリア半島におけるイスラーム勢力との約800年にわたる戦いのなかで、キリスト教勢力の牙城という機能を担うことになったのである。

2. 聖ヤコブ崇敬とレコンキスタ

イベリア半島の西ゴート王国は、711年にイスラーム勢力とのグアダレーテの戦いで滅亡し、サンティアゴも一時的に放棄された。その後、まもなくしてイスラーム支配に服さないキリスト教徒の小国が建設された。アストゥリアスは首都をオビエドに定め、ガリシア地方にも勢力を扶植したが、小人口や厳しい風土に加え、ノルマン人やイスラーム勢力の攻撃などの脅威もあり、政治的に不安定であった。

そうしたなか、9世紀にイリア司教テオドミーロの下で「聖ヤコブの墓」が「発見」されたのである。それは、奇蹟としてローマにも報告され、ローマ教皇レオ3世（在位795-816年）は、これを聖ヤコブのものと認知したとされる。当時のアストゥリアス王アルフォンソ2世（在位791-842年）は、その地に小教会を

建立した⁶⁾。早くも860年には、ヴィエンヌの大司教の著書に「ヘロデ王によって、エルサレムで斬首された．．．使徒聖ヤコブの聖なる遺骨が、スペインの端に移され、この国の信徒たちにこぞって尊崇を受けている」との記述が現れている（マール、216頁）。そして、聖ヤコブの遺体のサンティアゴへの移葬を根拠づける「聖ヤコブの移葬記」も9世紀中葉には現れていた（マール、216-26頁）。それらによれば、イエスの死後、聖ヤコブがスペインに来て伝道した。そのなかで7人の弟子がエルサレムに同行し、聖ヤコブの殉教の後、その遺骸を船に乗せてイリア（パドロン）に運んだ。パドロン海岸の巨石に遺骸を載せたところ、巨石が柩のようになり、飛翔してサンティアゴに落下したのである（関、2006年、82-83頁）。

それでは、なぜ突然に9世紀初めに聖ヤコブの墓が「発見」されたのであろうか。この当時、アストゥリアスは、イスラーム勢力の脅威の下、ローマ帝国・西ゴートの正統な継承者として首都オビエドを中心として、辺境の異教的なガリシア地方を組み込みつつ、王国支配を確立する必要があった。一方、西ゴートの首都であったトレドの司教は、イスラーム勢力支配下におかれたため、カトリックの根本教義である三位一体説と抵触する「キリスト猶子説」を唱えてローマ教皇と教義をめぐって緊張があった。これらの状況を背景に、ローマの支持およびその権威によりつつ王権を強化したいアルフォンソ2世の下、キリストに最も近い使徒としての聖ヤコブの聖性が利用されたと思われる（関、2006年、91-92頁；杉谷、2002年、114-26頁）。

アストゥリアス諸王は「聖ヤコブの墓」を王権の正統性を支え、王国の拡大に資するものとして庇護していった。アルフォンソ3世（在位866-916年）は、聖ヤコブを王国の守護者として、899年に「敵対する民から勝利を得ることができるよう」祈願して土地を寄進してサンティアゴ教会を改築し、荘厳化して奉献した（杉谷、1998年、69頁）。これは、聖ヤコブが巡礼の姿をとる「奇蹟行者」としてのイメージの他に⁷⁾、後に対イスラーム戦の守護聖人としてのイメージ「サンティアゴ・マタモーロス（イスラーム教徒を斃す聖ヤコブ）」が形成される素地になった。王国は、亡命モサラベ（ムスリム支配下アンダルスのキリスト教徒）を受け入れ、イスラーム勢力との闘ぎあいが進むなか、サンティアゴは聖ヤコブ崇敬の聖地となった。実際に997年、後ウマイヤ朝（コルドバ）の宰相アル・マンスール（在任978-1002年）がサンティアゴを攻撃し、教会を破壊して、その扉と鐘を戦利品として捕虜を使用してコルドバに持ち帰ったのは（ローマックス、63頁）、聖ヤコブ崇敬の中心として教会が繁栄していたことを証左するものでもあったといえる。一方、これは、聖ヤコブとレコンキスタ（国土再征服、国土回復運動）とを強く結びつけることにもつながった。その後、レコンキスタが進展するに従って、サンティアゴは、ヨーロッパ各地から巡礼者を集めるようになり、11世紀末から13世紀には最盛期を迎え、年間20-50万人もの巡礼者が訪れたという。

12世紀に出たサンティアゴ司教ディエゴ・ヘルミレス（在位1101-40年）は、国際的な聖ヤコブ崇敬を促進することで、サンティアゴの名声を高めるのに腐心した。また、1088年にイスラーム勢力から奪還されたトレドに復興された首都司教座の権威に対抗する必要もあった。ヘルミレスの下で5巻からなる『聖ヤコブの書—カリストゥスの写本』が編纂され、先述の「聖ヤコブがヘロデ王に斬首された後、弟子たちが遺体を海路ガリシアに運び、サンティアゴの地に埋葬した」との伝承が記された。さらに、当時、流布していた「カール大帝がイスラーム勢力より聖ヤコブの墓を解放して巡礼路を拓いた」という伝説も採用された（『シャルルマーニュ事蹟録／偽チュルパン年代記』、1126-65年頃；マール、130頁）。また、多種類の聖ヤコブにまつわる奇跡譚が収録された。カリストゥスとは、ヘルミレスの伯父の教皇カリストゥス2世（在位1119-24年）のことで、彼の名を帯することで、これらの文書の信憑性を高め、聖ヤコブ崇敬および巡礼を集めるのに多大の効果があったと思われる。また、ヘルミレスの死後には、サンティアゴ教会拡張の財源を捻出するため、9世紀前半のクラビーホの戦い—後ウマイヤ朝アブドゥッラフマーン2世（在位822-852年）との想像上の戦い—のさい「白馬に騎乗した聖ヤコブが出現し、キリスト教軍を救った」ため、アス

トゥリアス王ラミーロ1世（在位842-850年）が、サンティアゴ教会への寄進を約したとする「特権文書」が捏造された（ローマックス、257頁、注11；杉谷、2002年、133-38頁）。これは、12世紀中葉までに、第1回十字軍の実施（1096年）もあって「聖戦」の観念が「レコンキスタ」に導入され、騎士としての聖ヤコブのイメージが急速に定着するようになったことなども関係している。そして、この「特権文書」によって、人びとの間に聖ヤコブの「マタモーロス」のイメージが決定的に広がった。「サンティアゴの道」が確立され、聖ヤコブは、異教徒と戦うキリスト教徒の守護聖人として、戦場での無事を祈願する諸侯や騎士らによるヨーロッパ各地からの巡礼もいっそう盛んになった。

こうした背景には、11世紀になると後ウマイヤ朝の滅亡などイスラーム勢力の弱体化もあってレコンキスタの前線が次第に南下し、その後も紆余曲折はあったが、相対的にスペイン北部の政情が安定化したことがある。さらに、12世紀にはフランスのクリュニー修道院を中心とする信仰刷新の気運によって、巡礼行為が信仰生活の理想とされたこともあった。また、クリュニー修道院は、フランス人騎士を巡礼者としてスペインに導くことで、イスラーム勢力との戦いにこれらを利用しようとする意図があったと考えられる。そのため、巡礼路の整備にも意が用いられた。それに関連して、サンティアゴへの巡礼者の保護を任務としたサンティアゴ騎士修道会（騎士団）も12世紀に設立された（1170年）。

しかし、巡礼路の整備とともに、物見遊山、武者修行、無頼や浮浪者の往来、あるいは代参、強制巡礼なども増えた。13世紀中葉にはナスル朝グラナダを除いてイベリア半島はキリスト教徒の支配下におかれ、サンティアゴ巡礼の最盛期を迎えるが、同時に、信仰以外の目的での巡礼の取締りが始められた。その後、14世紀には、アヴィニヨンにも教皇が立つ教会大分裂のため、主要な巡礼路を擁するフランス・スペイン間の往来が困難になった。なかでも、サンティアゴ巡礼が衰退する契機となったのは、1492年、カトリック両王の下でレコンキスタが終焉したことだった。すなわち、聖ヤコブの対イスラーム戦の守護者としての使命が終わるとともに、新大陸の「発見」により「フィニス・テレー」も消滅したのである。

また、巡礼の世俗化が批判される一方、16世紀に出現したプロテスタントは、聖人崇敬や巡礼を禁止した。これに対抗するため、トリエント（トレント）の公会議（1545-47、51-52、62-63年）が開催され、教会改革が論じられた。そのなかで、カトリック教会の聖人・聖遺物・聖画像の崇敬は斥けないことが確認されたが、同時に民衆信仰や兄弟会の統制なども論じられ、サンティアゴ巡礼衰退の一因となった（関、2006年、35頁）。さらに、レバントの海戦後、1589年にはイギリスの略奪を恐れて聖ヤコブの遺物が隠匿され、その行方が不明となった。あるいは、フェリペ2世（在位1556-98年）の聖遺物収集癖の手を逃れようとして隠匿されたともいわれる（関、2006年、106頁）。この間、民衆の間には、特に16世紀より聖母マリア崇敬が興隆するようになった。それらの結果、18世紀には、サンティアゴに巡礼する者は年間わずか数百人のみとなり、スペインにおける政情の不安定や科学的思考もあって、19世紀には底を打った。

3. サンティアゴ大聖堂と大司教ヘルミレス

サンティアゴ旧市街は、かつて市壁に囲まれており、7つの門があった一天地創造に有した日数や聖ヤコブに同行してパレスチナに行ったとされる弟子数に一致する。10世紀末にアル・マンスールに略奪されたサンティアゴは、1050年頃には市壁に囲まれた市街が復興されたのである（杉谷、2002年、180頁）。現在、市壁は環状道路にその跡をとどめ、マサレロス門を残すのみである。市壁内には12の教会や修道院が存在し、キリストの使徒の数と一致する。その「聖なる中心」としてサンティアゴ大聖堂が存在する。

巡礼者は、現在、国際空港のあるラバコーリャを経て、モンテ・ド・ゴソ（歓喜の丘）からサンティアゴ大聖堂を遠望した後、サン・ペドロ通りを辿り、かつて市壁の東にあった「巡礼路門（Porta do Camiño）」から旧市街に入り、大聖堂を目指す。

現在のサンティアゴ大聖堂の原形は、1076-1211年の間に、フランスから建築師を招いて南フランスのロマネスク様式に則って建造された。ラテン十字形をなし、その頭に当たる内陣―主祭壇が設けられ、聖ヤコブの坐像が安置されている―は、イエルサレムの方向、すなわち東を向いている。現存の内部は、全長97メートル、天井のアーチ高22メートルの三廊式で、周歩廊などを備えた「巡礼路教会堂」様式の好例である。

この間、サンティアゴ巡礼の興隆とともに、1095年に司教座がイリア・フラビアからサンティアゴへ移転し、さらに司教ヘルミレスの働きによって、1120年にサンティアゴは大司教座に昇格した。初代サンティアゴ大司教に就任したヘルミレスは、クリュニー修道会やローマ教皇庁との関係を強化して、それまでのモサラベ典礼を廃してローマ典礼を導入し、教会改革を実施して、サンティアゴおよび巡礼の黄金期を形成した。その一環として、聖ヤコブの祝日は、それまで聖人が殉教したとされた12月30日であったが、それを7月25日とし、従来の殉教日を「移葬記念の祝日」とした（杉谷、2002年、242頁）。これによって、気候的にも、サンティアゴ巡礼がいっそう促進されることになった。

サンティアゴ大聖堂は、ロマネスク様式であったが、その後の改修や改築によって、多くの部分がバロック式などの様式になっている。現在の大聖堂のファサード（正面）は、1738-50年の間に建築されたスペイン・バロック期の傑作で、オブラドイロ広場に面し、西門が設けられている。西門内部の玄関の間に位置する「栄光の門」は、「神の国の門」想起させる棟梁マテオによるゴシック美術の傑作といわれる（1168-88年）。その半円形をなすチュンパヌム（タンパン）の中央には復活のキリスト像が浮彫りされ、またアーキヴォルトに沿って半円状に天上の音楽を奏でる「黙示録」の24長老が取り囲んでいる。それを支える白大理石の中心柱は「エッサイの木」（マタイ伝に基づいてキリストの家系をダビデの父エッサイから発する樹に表象する図像）に造型され、その柱の上には司教姿の坐する聖ヤコブ像が刻まれている。左右の脇柱には向かって右にペテロ、パウロ、ヤコブ、ヨハネの4使徒が、左にはエレミヤ、ダニエル、イザヤ、モーセの4預言者が刻まれている。中心柱の裏側には、棟梁マテオ像であると信じられているサント・ドス・クロケス像がおかれている。

巡礼者は、巡礼路門から市街に入り、大聖堂の北門のアサバチャリア（黒玉細工）門から聖堂に入った。北門前には施療院や泉が設けられ、またパライソ市場が巡礼者用に設けられていた。巡礼者は、主祭壇の聖ヤコブ像での祈りを経て、南門のプラテリアス（銀細工）門から出た。これは、巡礼者の贖罪を経て「黒」から「白」へと人格変容を遂げることを象徴する行為とも解釈される。サンティアゴの祝日の7月25日には主祭壇の前で大聖堂の天井から釣り下げられた巨大な銀色の香炉（ボタフメイロ）が8人掛かりで揺らされる。現在、この香炉は普段は大聖堂博物館の図書室の一隅におかれている。また、12世紀以来、聖なる年（聖ヤコブの祝日が日曜日に重なる年）にのみ開放される「聖なる門」は、キンタナ広場に向けて設置された17世紀の造形にかかる「聖なる門」入口から入る。聖ヤコブが「聖なる門」入口の上から巡礼者姿で人びとを見下ろしている（17世紀。両側のパネルは12世紀のもの）。「聖なる門」から大聖堂に入りミサに与る者は、それまでに犯した罪に対する宗教罰を特別に免除されるという恩寵に与るとされる。

一方、1879年に大聖堂の主祭壇の地下の発掘調査が行なわれ、聖ヤコブの遺骸が「再発見」された。教皇レオ13世（在位1878-1903年）は1884年の勅書によって、これを真正なものと認めた。その後、再び1946-59年にも発掘調査が行なわれた。その結果、ローマやスエヴィ時代の居住跡や3-4世紀頃のキリスト教徒の墓が発見されている。また聖ヤコブの遺体とされる遺骨は、その一郭に埋葬されていたらしい（杉谷、1998年、67頁）。また9世紀に聖人の墓を「発見」した司教テオドミーロ（847年没）の石棺も発見され、これが実在の人物であったことが確かめられている。

オブラドイロ広場の北側には、現在は国営宿舍パラドール（五つ星）となっているが、カトリック両王により15世紀末に設置が決定された王立施療院（オスピタル・レアル）であった。一方、12世紀以来のサン

ティアゴ教会の経営する旧来の施療院は北門前にあった。王立施療院は、王権直轄で、王立施療監督官が新しく組織された聖ヤコブ兄弟団の長となって維持され、巡礼者を収容し手厚い施療を行った。16世紀初期より孤児の救済を行ない、また16世紀中葉には、巡礼者の減少を背景に、地域住民の医療活動を担うようになったものである。当時の富と権力は慈善によって正当化されるという思想を背景に、神の恩寵をいただきつつ、王権を支える機能を果たした（関、2006年、213-31頁）。

オブラドイロ広場を挟んで大聖堂と相対するのは、18世紀中葉の大司教によって建設されたラショイ（Raxoi）宮殿である。現在は、サンティアゴの市庁舎（アユンタミエント）となっている。ラショイ宮殿の正面破風には、クラビーホの戦いの情景が浮彫りされており、その情景を支配するかのように屋根の上には騎乗姿のサンティアゴ・マタモロス像がオブラドイロ広場を見下ろしている。これは、大聖堂のオブラドイロ正面ファサードの中央部上方に居ます巡礼者姿の柔和な聖ヤコブと相対しており、その聖人の2面性を象徴するようである。

お わ り に

戦後、独裁者フランシスコ・フランコは、独裁体制強化のために聖ヤコブ崇敬およびサンティアゴ巡礼を利用しようとし、たとえば、1954年の聖年を機にして巡礼振興が取り組まれた⁸⁾。しかし、巡礼が盛んになってくるのはフランコ体制の終焉後の1980年代以降であった。それを象徴し、契機となるのが1985年のサンティアゴの世界遺産登録であろう。

2004年は聖なる年—聖ヤコブの年（Año Jacobeo/ Año Santo Compostelano）であった。その1年間にサンティアゴの巡礼者事務所で「コンポステーラ（巡礼行達成証明書）」の交付を受けた者は179,944人に達した。その前の1999年では154,613人であった。一方、巡礼路が世界遺産に登録される以前では聖年ですら僅かに1971年、451人；76年、243人；82年、1,868人であった。ところが、登録後の最初の聖年の1993年は99,436人と急激に増加した。しかし、それでも聖年間期の巡礼者数は、年間15-30千人に過ぎなかった。対照的に、平年の2007年が114,026人であったのを見るとまさに隔世の感がある（Jacobeco.net）。一時の衰退からの「聖地」の完全復活である。

中世のサンティアゴ巡礼者たちは、発心すると遺言書を認め、教区教会で告解し、ミサに与った後、講を組織するなどして巡礼行に出たという。彼らは、教区司祭により祝福された巡礼杖と頭陀袋を持ち、巡礼証明書を渡され、鍔広帽子、袖無しマントなどを着用した。その色は褐色で、半俗半聖の身分を象徴したとされる。途中の巡礼路では危険も多かったが、彼らは「神の貧民」として、王権や教会の保護を受ける対象であり、巡礼路に沿って設けられた教会、修道院を訪れ、その証明を受けつつ巡礼路を辿った。サンティアゴからの帰路は、ガリシア地方特産のホタテ貝を着装し、巡礼の紋章とされた（関、1999年、142-46頁）。

サンティアゴ巡礼の歴史を概観すると、筆者には、四国遍路にも通ずるものがあるように思われる。四国の「辺地」や「西方浄土」と「フィニス・テーレ」のイメージ、往来手形の「捨て文言」と遺言書、御朱印帳と「巡礼者手帳／クレデンシャル（credencial）」あるいは「コンポステーラ」、巡礼者の持ち物など共通する要素があるようだ。現代のサンティアゴ巡礼者は、中世のような装束を身につけてはいないが、巡礼路の世界文化遺産としての指定ともあいまって、現代の人びとの心を捉え、必ずしも宗教的な動機を第一義としない巡礼者の参加を含め、その数は増大している。日本でも四国遍路に対する関心の高まりがあり、近代の現象であるが遍路としての「白装束」も盛んになっている。ここに時代を越え、空間を越えた普遍性を窺うことができるようだ。巡礼の比較研究の進展がいつそう待ち望まれる。

最後に、世界遺産として、サンティアゴ巡礼路および旧市街が有名となるにつれ、巡礼者数の驚異的な伸びとともに、聖なる中心であったはずの大聖堂にも容赦なく、世俗化の波—信仰とは別次元の観光客が大挙

して押し寄せる現実がある。それを端的に示すものに「栄光の門」の足下の防護柵の設置がある。筆者が聖年の2004年1月に訪れたおりには存在しなかったが、07年12月には設置されており、巡礼行達成者らが中心柱にある「エッサイの木」に右手を押しあてて、額を垂れて祈ることを妨げている⁹⁾。これは、世界文化遺産となった信仰の中心としての聖地と観光資源としての聖地をめぐって、その保護・管理がいかにあるべきかの難しい問題が浮上していることを象徴するものであろう。次回の聖年2010年に向けて、どのような対策が講じられるのであろうか。

その一方、サンティアゴの巡礼者事務所で交付される「コンポステーラ」は、本質的に、カトリック教会による巡礼行達成の証明書であって、当然のことながら、信仰に基づいて巡礼を行った者（キリスト教徒）のみを対象としている。サンティアゴ大聖堂での巡礼行達成者に捧げられるミサに与れるのは、それゆえ、「コンポステーラ」を認められた信徒のみである。現在、非宗教的な動機で巡礼路を歩くのは全く自由であり、かつ「クレデンシャル」を所持していれば、信仰・宗教的動機の有無を問わず、巡礼者としてさまざまな便宜が与えられる。そのような巡礼者のために、教会の証明書とは別にヨーロッパの巡礼路上に存するナバラ大学を核とする大学ネットワークを通して巡礼達成の証明書を発行するシステムもある（*Acreditación Jacobea Universitaria*）¹⁰⁾。これらは、巡礼の世俗化に対応したものであると考えられる。すなわち、サンティアゴ巡礼が本来、カトリック（キリスト教徒）のものであり、そして、大聖堂は宗教施設であり、そこで執り行われるミサは、あくまで、その信仰をもつ者のためにあることは、巡礼路が世界遺産に登録されようとも世俗化しようとも変わらないのである。そのような側面についても、もっと注意が払われるべきであろう。

注

1) 下記に記載のサンティアゴの人口はウィキペディアに記載の数値による。手元にある *El pequeño Larousse ilustrado 2002* では人口は105,851人である、また *Guía del peregrino: Castilla y León* は88,000人としている。

2) スペインは17自治州およびモロッコ側の特別自治市セウタとメリーリャからなる。ア・コルーニャ県の首府はア・コルーニャである。ア・コルーニャはスペイン語ではラ・コルーニャ（*La Coruña*）である。

3) フランスの巡礼路として世界文化遺産に登録されたのは「ル・ピュイの道」の一部の範囲である。スペイン国内のその他の巡礼路としては、バスク、カンタブリア、アストゥリアスを経由する「北部の道（*Camino del Norte*）」、セビーリャからサラマンカを経てアストルガ／レオンで「フランス（人）の道」に合流する「銀の道（*Camino Vía de la Plata*）」、「モサラベの道（*Caminó Mozárabe*）」などがある。なお、主要な巡礼路については、山川教授報告掲載の地図を参照のこと。

4) セビーリャ大司教、11世紀にその遺骸が巡礼路上のレオンに移され、サン・イシドーロ聖堂が設立された（ローマックス、258頁、注17）。

5) 聖ヤコブの墓「発見」の年については、814年（伝承；関、2006年、巻末年表）、829年頃（杉谷、2002年、119頁）、830年（マール、215頁）などが示されている。

6) イリア・フラビア司教座は西ゴート時代に設置されていたが、アルフォンソ2世が再建した（ローマックス、41頁）。

7) マールによれば、巡礼姿の聖ヤコブの図像が現れてくるのは、13世紀からである。時代が下るにつれて、実際の巡礼姿を模したものになる。聖ヤコブの持ち物は、当初、処刑に使用された剣であるが、それが巡礼杖に変わり、食料袋やホタテ貝を運び、さらに巡礼者の鍔広帽を被るようになる。巡礼者の帽子は、教会の宝物庫に保管され、出発前のミサのおりに聖別して被せられるものであった（254-57頁）。

8) フランコの政策との関係は、筆者には現在のところ必ずしも明確ではないが、たとえば、ルーゴ出身のオ・セブレイロ教区司祭エリアス・バリニャ・サムベドロ（1929-89年）が中心になって、オ・セブレイロの復興がなされた。1960年代に、それまで放擲されていたサンタ・マリア・ラ・レアル教会（1964年）およびサン・ヒラルド宿（1966年）の修復、パリョーサ（palloza）と呼ばれる固有の家屋の復元などがなされた。これらの修復には、国家からの援助もあったようである。さらに、同司祭によって、1984年より巡礼路の復元調査や、現在、巡礼者が利用している道標の設置などもなされた（*O Cebreiro, Fama Vigo*, [2004]）。

9) 山川廣司教授のご教示によれば、2006年5月の訪問時にも防護柵は設置されていなかった。

10) サンティアゴの巡礼者事務所で、非宗教的な動機での巡礼路踏破者のための証明書も別に発行される。

参考文献

杉谷綾子「サンティアゴ巡礼と中世キリスト教スペインの社会」立石博高、関哲行、中川功、中塚次郎編『スペインの歴史』昭和堂、1998年、66-73頁。

杉谷綾子『神の御業の物語—スペイン中世の人・聖者・奇跡—』現代書館、2002年。

関哲行「中世のサンティアゴ巡礼と民衆信仰」歴史学研究会編『巡礼と民衆信仰』（地中海世界史4）青木書店、1999年、126-159頁。

関哲行『スペイン巡礼史—「地の果ての聖地」を辿る』講談社現代新書、2006年。

『週刊ユネスコ世界遺産（サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路、ブルゴスの大聖堂）』65（2002年2月21日）、講談社。

坂東省次、戸門一衛、碓順治編『現代スペイン情報ハンドブック』三修社、2004年。

エミール・マール「聖大ヤコブ」『キリストの聖なる伴侶たち』田辺保訳、みすず書房、1991年、204-257頁。

D. W. ローマックス『レコンキスター中世スペインの国土回復運動』林邦夫訳、刀水書房、1996年。

Bravo Lozano, Millán. *A Practical Guide for Pilgrims: The Road to Santiago*. 8th. ed. León: Everest, 2002.

Editorial Escudo de Oro, ed. *All Santiago*. Barcelona: Editorial Escudo de Oro, [2003].

Guerra Campos, José and Jesús Precado Lafuente. *Guide to the Cathedral of Santiago de Compostela*. Vitoria: ALDEASA, 1993.

Junta de Castilla y León. *Guía del peregrino: Castilla y León*. Junta de Castilla y León, 2007.

Martín Moreno, Ana 『一日散策サンティアゴ・デ・コンポステーラ（日本語版）』ALDEASA, 1999.

O Cebreiro. Vigo: Vigo Fama, [2004].

El pequeño Larousse ilustrado 2002. Barcelona: Spes Editorial, 2001.

Precado Lafuente, Jesús. *The Cathedral of Santiago de Compostela*. ALDEASA, 2000.

Vázquez de Parga, Luis, José María Lacarra, and Juan Uriá Riu. *Las peregrinaciones a Santiago de Compostela*. 3 tomos. Pamplona: Gobierno de Navarra, 1998.

関連ウェブサイト

<http://www.ige.eu/web/index.jsp?paxina=001> （ガリシア自治州の統計研究所のサイト）

<http://www.catedraldesantiago.es/> （サンティアゴ大聖堂公式サイト）

http://commons.wikimedia.org/wiki/Santiago_de_Compostela （ウィキメディア）

http://es.wikipedia.org/wiki/Santiago_de_Compostela （ウィキペディア、スペイン語サイト）

<http://www.jacobeo.net> （サンティアゴ巡礼に関するナバラ大学新聞学科による情報サイト。「カリストゥス文書」などの史料のダウンロードもできる）

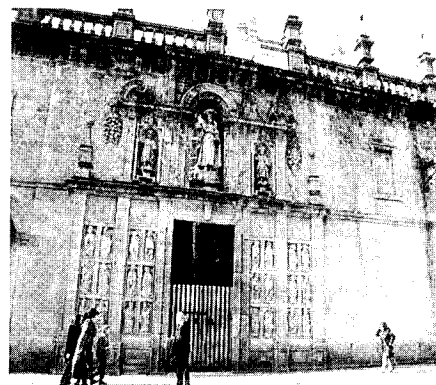
サンティアゴ・デ・コンポステーラ



聖なる門（大聖堂内部）



キンタナ広場、聖なる門入口（聖年2004年）



キンタナ広場、聖なる門入口（2007年）



マサレロス門



洗礼者事務所（ピラル街）



聖なる門入口上部の聖ヤコブ



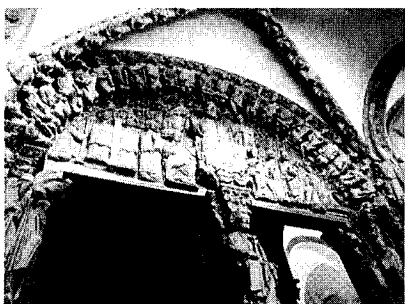
ラショイ宮殿とオブラドイロ広場



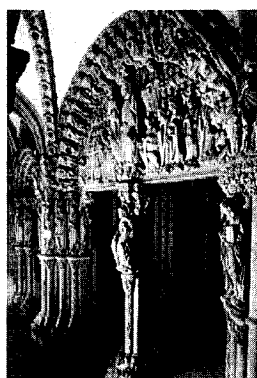
ラショイ宮殿とサンティアゴ・マタモーロスとクラビーホの戦い



サンティアゴ・マタモーロス（大聖堂、18世紀後半）。足下に斃されるモーロ人は花によって隠されている。



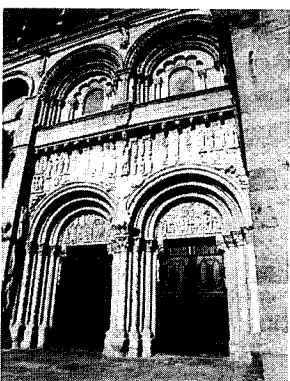
栄光の門（復活のキリストと聖ヤコブ）



栄光の門



アサバチェリア門（黒玉細工門）



プラテリアス門（銀細工門）



キンタナ広場、時計塔、聖なる門入口



正面が大聖堂主祭壇、上部にイベリア式パイプオルガンが見える。